FDガイド第7号

授業改善のためのヒント（2）

鹿児島大学 FD 委員会 FD ガイド WG

【発行／2014年3月】

ＦＤガイド第３号（2012 年 3 月発行）では、「各教員が効果的な授業及び履修指導を行うためのヒント」として、各部局のＦＤ活動から参考となる事例を抜き出して紹介しました。

本号では、評価の高いＦＤ関連書籍の中からそのヒントを紹介します。池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹（2001）『成長するティップス先生～授業デザインのための秘訣集』、佐藤浩章編（2010）『大学教員のための授業方法とデザイン』（ともに玉川大学出版部）などを利用しました。なお、ＦＤ委員会でＦＤ関連書籍を収集していますので、ご利用ください。

※書籍のお問い合わせは、学生部 教務課教育推進係（内線 8826、3705）まで。

◀『成長するティップス先生～授業デザインのための秘訣集』
池田輝政・戸田山和久
近田政博・中井俊樹

▶『大学教員のための授業方法とデザイン』
佐藤浩章編

1. 授業前の準備

授業開始前には、「受講生がどのくらい予備知識をもっているのか」を把握することが重要です。第一回目の授業の時に、習熟度を測るテストあるいはアンケートを行うこともよい方法の一つです。

一年生向けの共通教育では、高校を卒業したばかりの学生が対象ですから、予備知識を必要とする場合は、どのような知識が必要かシラバスに書いておく必要があります。

専門教育では、他の授業での知識が前提となっている科目も多いので、事前にどのような科目を履修しておくことが必要なのかを受講生に伝えておくと良いでしょう。

・シラバス作成時には、書き方の決まりに関する文書をよく読みましょう。部局ごとに違うこともあります。また、学部の授業と大学院の授業とでは書き方が異なる場合がありますし、年度が変わると書き方が大きく変わる場合もあります。

・シラバスは受講生に分かりやすいよう、言葉遣いに気をつけて、書きましょう。「授業の中で指示する」等の書き方は避けて、シラバスを読むだけで、どのような準備が必要か伝わるように、また、受講にかかる費用や授業外学習のやり方も分かるように書くと良いですね。

2. 講義をよくする工夫

授業をよくするために、教員それぞれいろいろな工夫がなされていますが、ＦＤ関連書では、（1）キーワードを明示する、（2）話し方を工夫する、（3）質問の仕方を工夫する、（4）板書の仕方を工夫する、などが重要だと指摘されています。

授業改善のためのヒント（2）

（1）キーワードの明示

本当に重要なこと（キーワード）を板書や配布するプリントの冒頭に書き、その内容をじっくり説明すると、授業が分かりやすくなります。

（2）話し方の工夫

授業アンケートでは「早口」「不明瞭な発音」だと分かりにくいという声が寄せられています。講義は「話し言葉」による意思疎通の一つなのですから、大きく、ゆっくり、学生に向かってはっきり話すことが重要です。

（3）質問の工夫

教員が質問を発し、学生を指名して答えさせることは、学生の集中力を高めるといわれています。質問した後に、①一人で考えさせる時間をつくる、②隣同士のペアで話し合わせる、③いくつかのペアで話し合った内容を発表してもらう（Think-Pair & Share）などという手法を取り入れると良いとされています。

（4）板書の工夫

板書の字は、大きく、ゆっくり、丁寧に書くことが大切です。学生には板書を写しとるために十分な時間をとることが必要です。写す前に教員に消されてしまったり、ノートをとることに専念して聞くことができないと、授業についていけなくなります。「講義を聴きながら、重要点をメモする」ことは、学生たちにとって相当難しい“スキル”であることを教員が知っておかなくてはなりません。

・パワーポイント等を利用すると、多くの情報を映写することが出来ますが、学生が書き写せないような早さで画面を切り替えてしまうことが起こりやすく、配布プリントに全てのスライドを印刷しておくと講義を聞かなかったり、画面を見なかったりする受講生も出てくると言われています。配布プリントには要点をわざと書かないで、学生に書き込ませるとか、ファイルは後で Moodle からダウンロードさせる等の工夫をする先生もいます。

3. 成績評価

成績評価は、学生がその評価結果をもとに、その後の学習を促進するために行われるものです。そこで、成績評価は**①評価目的の設定**「何のために評価するのか？」 **②評価基準の設定**「どのような基準で評価するのか？」 **③評価方法の設定**「どのような方法で評価するのか？」 **④評価結果**「目標は達成されたか？」という展開で行われるのが望ましいとされています。

成績評価は、学生が授業の目標を達成したかどうかに対して、なされなければなりません。成績評価は到達目標と対応している必要があります。

・成績評価に関する事項はシラバスに記載しますが、それだけでは受講生が評価の展開を理解し、評価後の学習を促進させるのは難しい場合が多いです。評価の目的、基準、方法、結果が、受講生の目指すべき学修成果とどのような関係にあるか理解できて頑張れるよう、授業内で説明するのが望ましいでしょう。

【鹿児島大学FD委員会FDガイドWG】

小栗　實（司法政策研究科委員）　松尾　智英（共同獣医学部委員）

安部　恒久（臨床心理学研究科委員）　佐久間美明（教育センター高等教育研究開発部長・水産学部）